

あるといえよう。

技術的・間接的には、新入生が大学に入学した途端に不規則な生活に陥ってしまうことがないように、1年次の必修科目を毎日1時限に配置するなど、隠れた配慮をしているが、自己規律のできない学生は、そのために却ってその時間の授業に遅刻や欠席をしてしまうこともあり、学生の健康教育はカリキュラムのみならず、学生の生活指導とも連携を取りながら進めていかなければならない。

## 2 カリキュラムにおける高・大の接続

(A群:学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況)

本学では、入学生が高等学校の学習から大学の学修に円滑に移行するための措置を、入学前にも入学後にも様々に講じている。入学前には、4つのプログラム、①AO入試を通してのレポート指導、②「入学前準備教育」、③併設の聖学院高校への出張講義、④「サマースクール」、⑤「入学前準備課題」を通してのレポート指導を行なっている。また入学後の新入学生に対しては、⑥履修指導、ガイダンス、⑦フレッシュマン・オリエンテーション(F. O.)の実施(p.96 正課外教育の項目参照)、⑧クラス・アドバイザー制度、オフィスアワー、⑨大学教育を理解させるための入門的授業科目の設置、などがなされているが、本項目のカリキュラム上の配慮に関しては、②の入学前準備課題の単位化と⑨の入学後の導入教育が特に重要であろう。

### 1) 入学前の指導

#### 【現状の説明】 ① AO入試を通してのレポート指導

AO入試は、「入試から始まる教育」という本学の入試に対する考え方を象徴する入試で、受験生一人一人の内に秘められた問題関心を引き出し、育て、表現する力をつけようとするものである。受験生に対する指導に関しては、受験生の人となりをよく理解している高等学校の教員とも連携を取りながら、個々の受験生に最も適した指導の仕方を工夫しており、合格判定が出る頃までにはかなり質の高いレポートが書けるようになっている。

#### ② 「入学前準備教育」

「入学前準備教育」は、2000年から実施しているプログラムで、例年2月には「英・数・国」、「コンピュータ基礎A」、「英語集中講座」の3つのプログラムが、3月には「英・数・国」のプログラムが用意されてきた(2006年には3月にも「コンピュータ基礎A」のクラスが開講された)。また、2004年よりプレゼンテーション教育がカリキュラムに加えられた。自己紹介や今後の学生生活で取り組んでみたいことなどについて、OHPを利用して発表するもので、効果的なレジュメを用意して人前で話をする練習の場を提

供している。

「英・数・国」の講座は、高等学校で学んだことを再確認し、また補うことを目指す講座であり、例年、全入学生の約35%が受講する。「英語集中講座」は、1年次に必修となっている英語科目「ECA (English Communication Arts)」の導入となる講座である。さらに「コンピュータ基礎A」は、1年次春学期の必修科目の単位を先取りして取得させるものである。

講師や運営は、2005年2月までは、東進ハイスクール（予備校）に依頼したが、2005年3月より本学で行っている（ただしビデオ受講は除く）。特に講師は本学より依頼した入学前準備教育指導の体験者で、本学の教育の趣旨を十分に理解し、意欲的にこの教育に取り組んでいる。

また、講習初日には各学科の教員がガイダンスを行なう他、上級生による相談を実施したり、運営スタッフによる10分程度の個別面談を行ったりして、受講に関する相談のみならず、入学後の過ごし方などの相談にも乗っている。

2002年度以降は、一般入試合格手続き者も対象者に加えられ、毎年受講対象者の5割から6割が受講している状況である。

### ③ 聖学院高等学校への出張講義

法人内の併設校である聖学院高等学校への出張講義は、土曜日に3年生を対象として開かれる総合学習の授業の一環として、「日本の課題、世界の課題への視点」という統一テーマのもとにオムニバス形式で実施されている。この講義の受講者で本学に進学した生徒に対しては、自由科目の1単位が与えられることになっており、2004年度入学生1名、2005年度入学生3名が単位認定を受けている。

### ④ 「サマースクール」

「サマースクール」は2005年8月に「小論文講座」を試験的に開講する形で始まったもので、9月には「小論文講座」に加えて、政経学部、人文学部、2コースの「分野別講義」（各4コマ）も開講した。2006年度は、「小論文講座」、「英語リスニング講座」、「分野別講義」（政経学部、人文学部各1コース）を計10コース実施する。「小論文講座」、「英語リスニング講座」は受験対策も視野に入れた講座ではあるが、いずれも大学での学びにとっても不可欠な技能の習得を目指すものであり、特に「英語リスニング講座」は欧米文化学科に入学する生徒には是非体験して欲しい講座である。

また、「分野別講義」は、各学部の、専門分野の異なる教員によるオムニバス授業であるが、オープンキャンパスの体験授業（30分）や高等学校での出張講義（通常50分）とは異なり、70～90分の講義である。2005年度には政治経済学部は「選ぶ」、人文学部は「比べる」を、また、2006年度には政治経済学部は「金（カネ）の力、人の力」、人文学部は「旅」を統一テーマとして、各専門分野の学びの基礎についての講義を行なう。

⑤ 「入学前準備課題」を通してのレポート指導

AO入試のみならず推薦入試、自己表現入試など12月までに合格が決定した受験生に対して、「入学前準備課題」の提出を求めている。欧米文化学科では、1回の面談指導と、2～3回の郵便のやり取りによる添削指導を実施している。そして、2004年度以降、「レポート作成法」（1単位）という科目を開設してさらに指導を継続し、単位認定を希望する学生が単位を取得できるようにしている。

【点検・評価】  
【課題・方策】

高等学校における学習と大学での学問研究の橋渡しとしての出張講義、体験講義、入学試験、入学前準備教育は、全体として成果を収めていると言える。

入学前準備教育（②）の場合、期間中に受講者の個人面談を実施しており、それによって変化する高校生の気質とニーズにいち早く対応することにも成功している。受講者は全入学者の約35%程度であるが、入学者の中には地方からの入学者や留学生も含まれていることを考慮すると、強制力のない講座としては、かなり高い比率であると考えられ、この比率の高さからも、この講座が入学予定者のニーズに合ったものであることが証明される。

しかし、入学後の学修に直接に繋がる講座を受講する入学予定者の比率は英語集中講座の場合には約5%、コンピュータ基礎の場合には6分の1に留まっている。特に「コンピュータ基礎」はそのまま必修科目の単位として認定されるので、講座の趣旨をさらに周知徹底させなければならない。

入学前準備課題については、すでに単位化の実施から3年を経過しており、指導方法や成績評価のシステムも定着してきた。このような形で単位認定を受ける学生は、例年約80名程度であるが、1月以降の入学試験で合格し、入学前にレポートの書き方指導を受けるチャンスを得られなかった学生のためには、「レポート作成法B」という科目を用意して、入学後、1学期をかけて指導を受けられるように公平性を図っている。欧米文化学科以外の学科でも入学前準備課題を実施しているが、未だ単位認定はされていないので、喫緊の検討課題である。

併設の聖学院高等学校における出張講義は、高・大連携という考え方からも、幼稚園から大学院に至る学校法人の一貫教育という点からも、大事に育ててゆくべきものであろう。しかし、講義の担当者は年間で6名程度と限られており、多くの大学教員にはそのような講座が開かれているという認識も乏しいように思われる。また、聖学院高等学校の生徒たちも、総合学習の多岐にわたる科目の中からクラスを選択する際に、大学教員による出張講義の受講が大学での単位認定に繋がるという認識はないと言って良い。大学、高等学校双方の更なる理解と周知への努力が必要である。また、併設の女子聖学院高等学校に対しても、同様の講座を企画、提案することが望まれる。

分野別講義や、オープンキャンパスでの体験講義は、大学教育への導入としては非常に良い試みであると思われるが、より実り多いものにするためには、単位認定の可能性

を模索する時期に来ている。

さらに、聖学院を開かれた大学とし、高等学校との更なる連携を図るためには高校生に向けて大学の授業を開放することも検討する時期に来ている。例えば、欧米文化学科では夏期休暇中に児童英語関係の科目の集中講義が開講されているので、一定の条件を充たした高校生に対して受講を認め、入学後に単位認定を行うことも可能なのではないだろうか。いずれにしても、高・大連携はまだ模索途上にあり、高校と大学が連携を取りながら、生徒・学生のニーズに応える努力を続けなければならない。

## 2) 入学後の指導

### 【現状の説明】 ① 履修指導・ガイダンス

本章第2節に詳しく述べるように、新入生の履修指導は、教務課職員による学科別説明会、上級生による個別履修相談など、試行錯誤を繰り返しながら、きめ細かく行われている。履修登録は2005年度秋学期からWeb登録となった。

### ② フレッシュマン・オリエンテーション（F. O.）の実施

1泊2日の合宿を実施して、新入生を大学の雰囲気や生活に早く慣れさせ、友人作りの機会を与えている。フレッシュマン・オリエンテーション（F. O.）については正課外教育の項目（p.96）に記述。

### ③ クラス・アドバイザー制度、オフィスアワー

学生数約10名を1名の教員が指導するアドバイザー制度が実施されている。アドバイザーは、学生一人ひとりの把握に努め、履修や奨学金受給の相談、休学や留学など学生の進退に関わる相談にも乗っている。また各教員は週2コマ分のオフィスアワーの時間帯（水曜日2時限のアssenブリアワー＋授業の空き時間1コマ）（アssenブリアワーについてはp.93に叙述）を定期的に設け、これを学生に公表し、学生の個別相談に応じている。アssenブリアワーにも、1学期に2、3回、学生相談日を設け、クラス全員がアドバイザーの下に集まり、学生同士、学生と教員の意思疎通を図っている。学内に張り巡らされた光ケーブルを基幹とするコンピュータ・ネットワークを最大限に活用し、教職員と学生との間のコミュニケーションを進めている学科（コミュニティ政策学科）もある。

学年が進むと、クラス・アドバイザー制度は専門演習の教員に引き継がれる。専門演習が始まる年次は学科によってまちまちであるが、概ね2年次秋学期、ないしは3年次である。演習では演習担当の教員が、履修学生の生活指導、就職指導などに当たっている。

### ④ 各学科における導入教育

さらに各学科では様々な仕方による個性的な導入教育が行われている。

コミュニティ政策学科では特に「予備演習（2単位）」を設け、必修科目として全学生に課している。これは、入学直後から2年次の「専門演習」への移行期間の導入教育を中心とするもので、教員は、新生が大学生活に適應できるように、基礎学力の向上を図ると共に、キャンパス生活全般にわたる個別相談を受け、1年次の終わりにはそれぞれの学生が自己の専門領域を見出し、2年次の「専門演習」を適正に選択できるよう指導している。

日本文化学科では、新生が高等教育に必要な読解力や表現力、さらに論理的な思考能力という基礎的な力を養うことを目的に、「全学的教育」の項で既述した「書き方」「話し方」(p. 31)の外に、「日本語表現法①」「同②」「日本語表現法（ディベート）Ⅰ」「同Ⅱ」が設定されている。

欧米文化学科、児童学科、人間福祉学科ではそれぞれ「欧米文化入門」「児童学総論」「人間福祉総論」を必修科目として設置し、学科教員全員によるオムニバス形式で入門的な授業を行ったり、学科に必要な基礎知識を確認したり、授業の受け方を指導したりして、学生が円滑に大学教育に慣れるような配慮をしている。また各学科とも、図書館の協力を得て図書館ツアーを企画し、図書館の利用法や文献検索の仕方を指導している。欧米文化学科では2006年度から「欧米文化入門」の授業内容に、ノートの取り方、スケジュール管理の仕方などの項目を加えた。

なお人間福祉学部では、2005年度までは、導入教育の一環として、「書き方」「話し方」2単位が入学後課せられていたが、2006年度からは、時間割上資格取得を目指す専門教育科目の履修を容易にするため、必修科目から外した。しかし、将来、「相談・援助」を業とする学生にとっては必須な知識、技能であることから、履修指導によって、1年次に限らず選択履修することを強力に勧めている。

**【点検・評価】** 新入学生が学修や生活の全般にわたって高等学校から大学への変化に早く慣れるための配慮は、カリキュラム上も、授業以外の様々な面でもきめ細かになされているといえる。それにも拘らず、例えば、履修説明会での説明を聞こうとしない、理解しようとしな、要覧やシラバスを予め配布すれば当日持参しないといった新入学生や、また2年次になってもノートの取り方が分からない、試験にどう備えたらよいか分からないと言う学生も少なからずあり、大学側の「面倒見の良さ」が学生の現状に追いつかない面も見られる。

その意味では、高等学校から大学への学修の円滑な移行を促すためには、カリキュラム上の配慮だけでは不十分であり、生活の隅々にわたる細やかな指導が必要であるといえる。

例えばノートの取り方一つについても、中学校や高等学校で教師の板書だけをそっくり書き写すことを指導され習慣づけられている学生に、ノートは自己の備忘のためのもの

### 第3章

#### 学士課程の教育内容・方法等

のであり工夫して自己流を確立すべきものであることを説いても、学生はどうしたらよいか分からず、「板書の仕方が悪い」として授業への不満を抱くようになってしまう。これは中学、高等学校の教育に問題があることの証左でもあるが、入学生の多様化に即した個別的な指導が必要である。2005年度には「ラーニングセンター」が設立され、学修方法などの個別相談に乗っているが、そうした制度を利用しようともせず落ちこぼれていく学生は、退学する惧れのある学生でもある。自分で試行錯誤を重ねる意欲も習慣もなく、言われたことだけをしていれば良いという覇気のない学生にいかにして主体的な学修意欲を持たせるかが重要課題である。

**【課題・方策】** 英語のように学力別クラス編成をしている必修科目を別とすれば、多様な学力と学習態度の不特定の学生が履修する選択科目では、授業の照準をどこに合わせたら良いか迷うところである。文科系、社会系の授業では、日本史、世界史、古典文法などを履修していない学生が多いと授業が成り立たないので、学力の多様化がさらに進むようなら、将来的には基礎力に関する一斉テストを実施して、学力不足の学生には補習を行うなどの措置も必要になろう。高等学校で学ぶべき科目が未履修であったり、履修しても全く力がついていないような学生には、生半可な応用よりも基礎からしっかりやり直させる方が、就職試験のためにも結局は近道であるかもしれない。

ところで、大学での新しい学習方法に適應するか否かは、何よりも学生の意欲に因るところ大である。基礎からの復習と相俟って、学生が、投げやりな人生を送らずに、自分を大切にするような教育、自己と「今」という時をかけがえのないものと感じ使命感をもって生きる教育、ある意味では一層自己に執着して主体性と積極性をもって生きるような教育がなされなければならないであろう。そうした主体性や積極性は、理屈よりも、教師のちょっとした褒め言葉や教師から見つめられているという感覚によって促されることもしばしばである。それはひいては超越的な者に見守られている、というキリスト教信仰に通じるものでもあるゆえに、礼拝の共通テーマを設定するキリスト教センターとも連携しつつ、全学的に学生を守り育てる体制を整える必要がある。

### 3 カリキュラムと国家試験

#### 1) 人間福祉学科における国家試験の状況

(C群：国家試験につながるカリキュラムを持つ学部・学科における、受験率・合格者数・合格率)

**【現状の説明】** 聖学院大学においては、人間福祉学科に社会福祉士及び精神保健福祉士の国家試験受験資格を取得できるカリキュラムが設定されている。学科開設以来の受験者数、合格者数及び合格率は以下の表のとおりである。